

生列伝二十四」の本文口語訳を要約引用したものを以下に記してみる。）

屈原は名は平。楚の国王の同族だった。楚の懷王（前328―298年）の左徒となった。博学で記憶力に優れ、治乱のあとを知り、辞をつづることに習熟していた。懷王は非常に彼を信任していた。一方、上官大夫はかれと同列であつて、王の寵愛を争い、心中彼の有能をねたんでいた。ある時屈原のことを讒言した。王はそれから屈原を疎んずるようになった。屈原は王のことを憂愁し、ふかく思いをめぐらして『離騷』を作った。屈原が朝廷で地位を失つてしまったのち、懷王は、秦の策略にはまり、また懷王の末子子蘭の進言を信じて、秦で死んでしまった。その後、長子である襄王（前298年）が即位し、弟の子蘭を令尹（宰相）とした。楚の国の人々は子蘭が懷王に秦に行くことをすすめて王の帰れなかつたことを彼の咎だと思っていた。屈原は彼を憎んでいた上に、自分が追放されても楚の国を見離すようなことはせず、いつも心を懷王によせ、帰国の念を捨て切れず、主君が悟ってくれること、人々の悪習が改められることを期待していた。一方の令尹子蘭は屈原が憎んでいると聞くと激怒し、そのあげく上官大夫をそそのかして屈原のことを頃襄王のまえでののしらせた。王は怒つて屈原を遠くへ流した。屈原は長江の岸边に来、髪を振り乱して沼沢地を歩きつつ、苦しみの声をもらし『懷沙』の賦を作った。

▼そしてこれに続く『史記』の次の一文が、この五十八句の詩語の措辞となつていられると思われる。

乱曰。浩々沅湘兮、分流汨兮。脩路幽拂兮、道遠忽兮。曾唵恆悲兮、永歎慨兮。世既莫吾知兮、人心不可謂兮。懷情抱質兮、獨無匹兮。伯樂既歿兮、驥將焉程兮。人生稟命兮、各有所錯兮。定心廣志、餘何畏懼兮。曾傷爰哀、永歎喟兮。世溷不吾知、心不可謂兮。知死不可讓兮、願勿愛兮。明以告君子兮、吾將以爲類兮。於是懷石、遂自投汨羅以死。